就職問題を考える

株式会社日本コンピュータ開発　相談役最高顧問　**高瀬　拓士**

1. はじめに

バブル経済崩壊を機に，戦後一貫して突き進んできた経済発展の問題点が一気に噴出してきました。利益のため，生き残るためには手段を選ばない企業経営の横行。つい最近も有名ホテルのレストランでの不正が発覚しました。かつて「物金にこだわる人は意地汚い人」とさえ言っていた精神文化はどこへやら，他人を踏み台にしてでも自己利益を図る風潮の社会になりました。そのようにして大金をつかみ，六本木に住み，自家用機でも乗り回すような人が現れると，この国を動かす政治家までもが，その人を人生の英雄，成功者のように持ち上げ，若者達もそういう人生にあこがれるという実例を見ました。

このような異常な“経済発展”が崩壊し，経済が低迷を始めると日本人は皆自信をなくし，うなだれ，国中が長い閉塞感の中に落ち込んでしまいました。あの右肩上がりの経済発展に浮かれているうちに，各地で限界集落といわれる集落が多発し，国は地方から崩れ始めています。OECDが2012年５月に発表した，OECD加盟国にロシア，ブラジルを加えた36ヵ国の国民幸福度調査結果によると，１位はオーストラリア，次にアメリカ，ノルウェーが続き，この世界もうらやむ豊かさ溢れる平和国家日本は21位という信じがたい結果になっています。私のように，戦後の貧しさの中で向う三軒両隣が助け合い，支え合って仲良く生きたあの古き良き時代を知る古い人間には，政治や教育をはじめ，社会全体が乱れてきたように感じます。つまりは国民の民度が下がってしまったということでしょう。いったい経済発展の目的は何だったのかと考えさせられるこの頃です。

私は最近，出版社の幻冬舎から強い提案を受けて「いつ倒産しても良い経営」と題する書籍を出版しました。そのなかで私は，経済発展をリードしてきたのは企業であるという認識に立てば，この社会の乱れの責任は企業にあり，企業は今こそその存在意義を見直すときだと強く主張しました。企業に働く社員は，自社利益のためだけに働く企業戦士ではなく，社会を構成する社会人です。そして，起きている時間の大部分を職場で過ごし，企業文化の影響を強く受けます。つまり“企業は最高最強の社会人教育機関”として，国民の民度に大きな影響を与えています。だから民度を向上させること，それができるのは企業ではないかと考えています。しかしながら，人がすでに身につけてしまった習慣や意識を改革するのには大変な努力と時間がかかります。したがって，この12,800万人もの国民の民度をすべからく向上させることなど不可能でしょう。

一方で私は“汚れた川を綺麗にするには，ハイテク機械をその川に投入して浄化を図っても不可能で，上流から綺麗な水を流し続けるのが一番良い”と考えています。同じ発想から，民度を向上し，この乱れた社会を綺麗にするには，学業を終わり新たに社会に出てくる若者達を，良き社会人として育てることから始める必要があると考えます。しかしい

かに企業が最高最強の教育機関だとしても，教育対象者である，新たに社会に出てくる学生達の質が伴うことが大切です。つまり学生生活を終わり，どのような意識で社会に出てくるのか，その就職観が問題です。

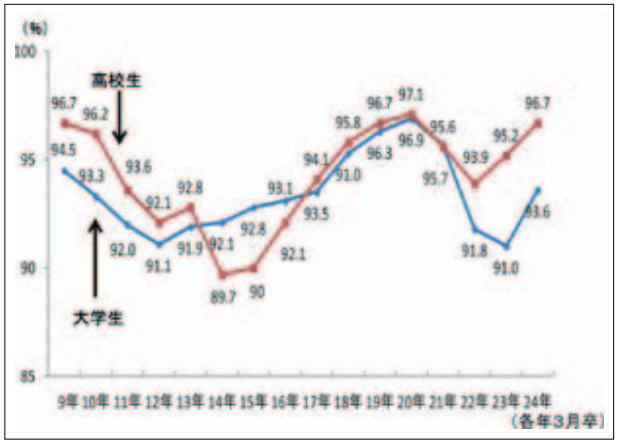
しかしながら長年にわたって採用活動にかかわってきた私の経験によれば，誠に残念ながら学生達の就職活動，就職意識は間違っていると思います。本稿では，なぜそのように思うのか，私が考える“就職とはどういうことなのか”を，主に最高学府たる大学の卒業生の実態を参考にして述べたいと思います。

2. 若者達の就職にかかわる実態

2.1 新規卒業者の就職実態

長引く経済低迷の中で，各学校の学生課や就職センター部門などが，卒業する学生の就職率向上に悪戦苦闘しています。就職シーズンともなれば大学生達は授業に集中できず，学生課や就職センターの指導とは別に，自らインターネットや会社訪問を通じて会社情報を収集し，就職試験に応募するなどで，多くの時間を就職活動に消耗しています。その数は少なくても数十社，多い人は100社を超えて訪問しているという状態です。そのような厳しい就職活動の結果，卒業までに内定を得た学生の比率，つまり就職内定率を第１図に示します。

このグラフから大学生の場合，特に厳しかったといわれる平成12年３月卒業生を含めても，毎年90％以上の学生達が卒業前に内定を貰っていることがわかります。見方を変えれば，大学を卒業し就職を希望しても，毎年10％弱の若者達が，卒業後の就職先を見つけられずに社会に出てきているということでもあります。そこで就職関係者はこの状況を“就職氷河期”などと表現しています。しかし長年にわたって新卒者の採用にかかわり，毎年大学生と接してきた私の経験から言えば，入学しても学ぶ意欲は低く，アルバイトや部活に多くの時間を割き，学ぶことより卒業単位取得にしか関心のないような学生が多い最近の大学生でも，その90％以上もの学生が



第１図　高校生・大学生等の就職希望者の就職内定率の推移
(厚生労働省　若者雇用関連データ，
高校生・大学生等の就職内定率の推移より)

＊１）大学生の就職内定率とは，就職を希望している大学生の内，各年４月１日現在の，就職が決まった大学生の比率

＊２）高校生の就職内定率とは，学校やハローワークに相談した高校生の内，各年３月末日現在の，就職が決まった生徒の比率，これを各大学や新聞などが就職率として発表し，就職に強い学校かどうかの比較に使われたり，就職環境の良し悪しの指標に使われたりしています。

在学中に内定をもらえるというのはきわめて高い就職率だと思います。

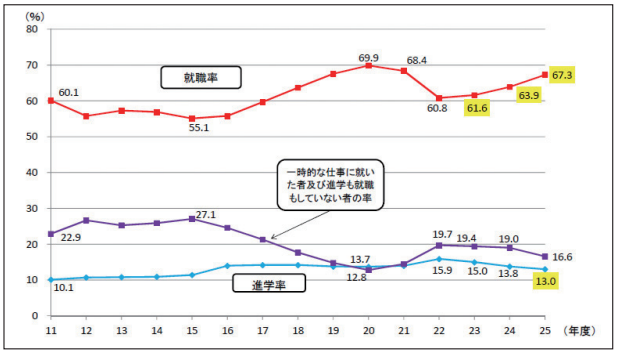
当社が国際貢献の一環として毎年インターン学生を迎えている南米コロンビアの学生達は，貧しい中で苦労しながら必死に勉強している人が多く，それでも業務経験のない新卒学生の就職はほとんど不可能だといわれています。入学は容易でも卒業は難しいといわれるアメリカでも，取り柄のない新卒学生の就職はきわめて厳しく，教育熱心で進学競争の激しい韓国，上昇指向が強く意欲的に勉学に励む中国の学生達にとっては，氷河期などと表現されている日本の就職環境は楽園のように写ることでしょう。

一方，表１，第２図，第３図は，平成25年８月７日に文部科学省から公表された，平成25年度学校基本調査結果（速報値）で，最近の大学生全員の進路・就職状況を示しています。

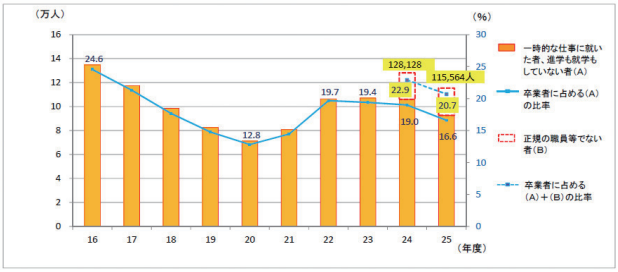
表１　最近の大学卒業生全員に対する就職率の推移表
（文部科学省平成25年度学校基本調査の表４より）

（人（％））

区　分	卒業者	進学者(率)	就職者（率）		うち正規の職員等でない者	（率）①	一時的な仕事に就いた者（率）②		進学も就職もしていない者（率）③		不詳・死亡（率）		安定的な雇用に就いていない者（率）①+②+③	
平成16年3月	548,897	77,022 (14.0)	306,414	(55.8)	…	…	24,754	(4.5)	110,035	(20.0)	22,699	(4.1)	…	…
17年3月	551,016	78,169 (14.2)	329,125	(59.7)	…	…	19,507	(3.5)	97,994	(17.8)	18,398	(3.3)	…	…
18年3月	558,184	79,337 (14.2)	355,820	(63.7)	…	…	16,659	(3.0)	82,009	(14.7)	15,108	(2.7)	…	…
19年3月	559,090	77,165 (13.8)	377,776	(67.6)	…	…	13,287	(2.4)	69,296	(12.4)	12,503	(2.2)	…	…
20年3月	555,690	76,343 (13.7)	388,480	(69.9)	…	…	11,485	(2.1)	59,791	(10.8)	10,803	(1.9)	…	…
21年3月	559,539	78,265 (14.0)	382,485	(68.4)	…	…	12,991	(2.3)	67,894	(12.1)	8,904	(1.6)	…	…
22年3月	541,428	86,039 (15.9)	329,190	(60.8)	…	…	19,332	(3.6)	87,174	(16.1)	10,807	(2.0)	…	…
23年3月	552,358	82,657 (15.0)	340,217	(61.6)	…	…	19,107	(3.5)	88,007	(15.9)	13,521	(2.4)	…	…
24年3月	558,692	76,856 (13.8)	357,088	(63.9)	21,993	(3.9)	19,569	(3.5)	86,566	(15.5)	9,797	(1.8)	128,128	(22.9)
25年3月	558,853	72,821 (13.0)	375,959	(67.3)	22,786	(4.1)	16,850	(3.0)	75,928	(13.6)	8,523	(1.5)	115,564	(20.7)



第２図　最近の大学卒業生全員に対する就職率の推移グラフ
（文部科学省平成25年度学校基本調査の図６より）



第３図　一時的な仕事に就いた者，
進学も就職もしていない者の推移
（文部科学省学校基本調査の図９より）

第１図は卒業時就職を希望する者に限った就職率データでしたが，表１，第２図，第３図は卒業生全体に対する就職内定率を示しており，多少改善されたという平成25年３月卒業生でも，学士で67.3％，修士課程修了者で73.7％，博士課程修了者では65.9％ときわめて低い数字です。なかでも問題なのは，第１図に見た就職希望を持ちながら就職できなかった人を含む安定的な雇用に就いていない人，つまり「正規の職員等でない人」と「一時的な仕事に就いた人」および「進学も就職もしていない人」が，全卒業生に占める割合は実に20.7％にもなっているということです。

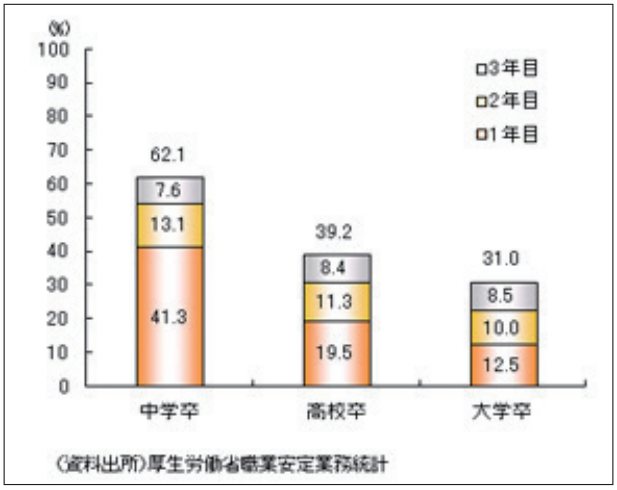
少子高齢化の中で，次代を担う数少ない貴重な若者達の20％以上もの人達が，卒業後の居場所も決まらないまま，あるいは不安定な状態のまま社会に出てきて，日々をどのように過ごしているのでしょうか？　環境が人を育てるという観点から考えると，不安定な環境の中にある，あるいはやるべき仕事もなく暇を持て余している環境は最悪で，それを個人の自由な生き方の問題だと言って放置しておくのは，本人にとっても社会にとっても将来に禍根を残す大きな問題だと思います。

世間には，若者の就職率が向上せず，安定的な就職ができない原因は経済不況，その結果として採用人数を絞る企業に責任があるという意見があります。私はそのことをあえて否定するつもりはありません。しかしながら本分である学びを忘れ，アルバイトや部活に多くの時間を割き，進学の目的も定かでなく，卒業単位取得が学生生活であるかのような誤解をしているようにみえる最近の学生達。結果として学士にふさわしい基礎学力や年齢相当の人間力がないばかりでなく，なかには生きる意欲さえもなく，社会に出るに当たってはその心構えも，認識も，働く意欲もなく，就職を部活への入部と混同しているかのように感じられる最近の若者の多さに危機感さえ覚えます。就職とは，社会人になるとはどういうことか，考えたこともないように感じられます。そのことについては後で述べましょう。

2.2　内定を得て社会に出た若者達の就職後の実態

それでは卒業までに内定を得て就職した若者達の，その後の動向はどうでしょうか？　第４図は厚生労働省が発表した，平成22年３月卒業生のその後の状況を示すデータです。

この図によれば，就職超氷河期などといわれる中で，中学生や高校生はハローワークや学校を通じて，また大学生は学生課や就職センターなどの支援に加えて学生自身も就職活動に悪戦苦闘し，やっと就職したにもかかわらず，多くの若者達がいとも簡単に最初の就職先を離職している実態がわかります。就職後３年以内の離職率は，中学，高校，大学



第４図　平成22年３月卒業者の離職状況
（厚生労働省　若者雇用関連データ，新規学卒者の離職状況から）

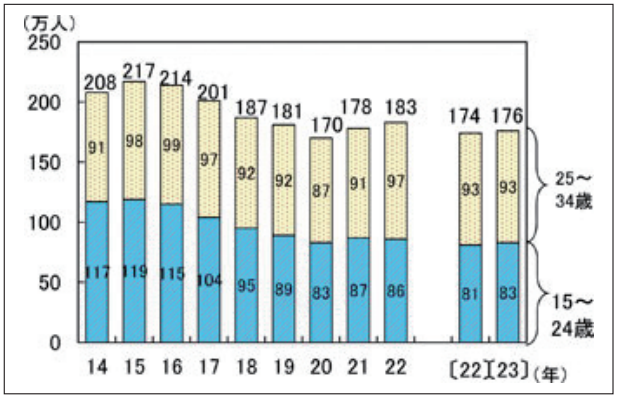
＊過去の推移や事業所規模別，産業別の状況についても同じ厚生労働省の「新規学卒者の離職状況に関する資料」で見ることができる。

卒業生それぞれ62.1％，39.2％，31.0％となっています。

この状況を，就職に関する７－５－３という言葉が，日本社会では10年以上前から常識になっています。つまり中学，高校，大学新規卒業生の，就職後３年以内の離職率がそれぞれ70％，50％，30％という意味で，最近多少改善されたとも言われていますが，それでも第４図に示すとおり，ほぼそのような数字になっています。いったいなぜこのようなことになるのでしょうか？

そのことを若者達に質問すると「就職時の期待と違った。好きな仕事ができないから」と言い，なかには「転職自由の時代だ」などという返事が返ってきます。そのようなとき私は，“学生達は就職，つまり社会人になるということがどういうことか，仕事とはどういう性質のものなのか？”など考えたこともなく，就職と部活への入部を混同しているのではないかと思います。自分自身の価値も転職の意味もわからない未熟さを感じます。そのようにして離職した人達は，その後をどのように過ごしているのでしょうか？

第５図は厚生労働省が発表した，フリーターといわれる人達の人数の推移を示すものです。



第５図　フリータ数の推移
（厚生労働省　若者雇用関連データより）

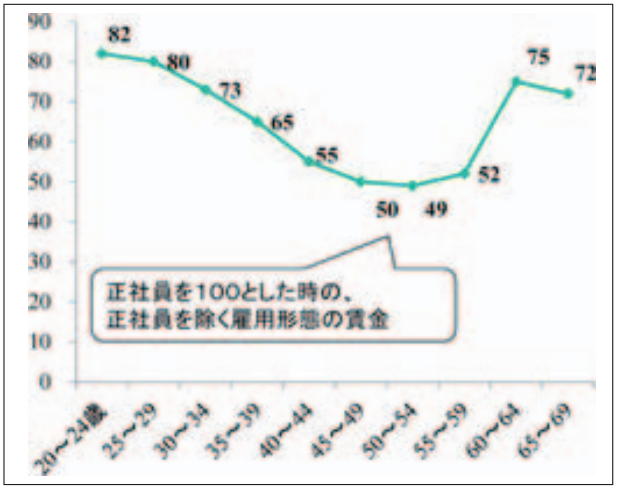
＊ここでいうフリーターとは，15～34歳の男性，または学生を除く未婚の女性で，パート，アルバイトとして働く人，あるいはこれを希望する人のこと

フリーターの中には，やりたい仕事が見つかるまでの一時的な就職場所とする人，正規雇用を希望しながらもそれが得られずやむを得ず働く人，明確な目標を持ったうえで生活の糧を得るために働く人などが含まれますが，卒業時に内定をもらえなかったり，３年以内に離職した人達の一部もこの中に含まれているでしょう。

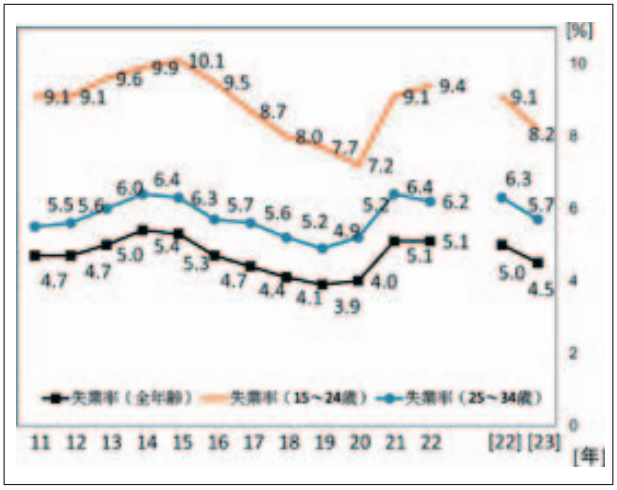
自ら明確な目的があってフリーターを選んだ人は，その目的が達成される限りそれでよいでしょう。しかしながら，やむを得ずフリーターの道を選んだ人，あるいは安易な離職でフリーターになった人たちは，特に価値ある知識や技術などを持っている人を除けば，いったんフリーターになると，正社員の道を見つけるのは至難の業だと言えます。それだけではありません。第６図をご覧ください。これはフリーターで働く人達と正社員の生涯賃金格差を示しています。45歳－54歳では正社員の半分です。

良い条件，あるいは正社員の道を探して企業を渡り歩いているうちに，働く意欲をなくしたり社会不信に陥ったりすることになるかもしれません。安易な離職が人生を狂わせることになる可能性があるのです。

一方で第７図をご覧ください。これはニート，つまりNot in Education, Employment or Training（就学，就労，職業訓練のいずれも行っていない若者）の推移を示すもので，毎年60万人もの若者がこの状

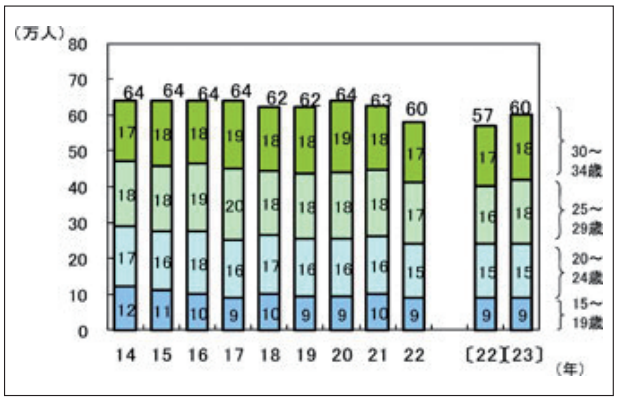


第６図　フリーターと正社員の生涯賃金格差
（厚生労働省　若者雇用関連データの賃金格差図より）



第８図　完全失業率の推移
（厚生労働省　若者雇用関連データより）

態にあります。この中にはフリーターになった人達が，社会不信や自信喪失からニートになった人も含まれていると思います。



第７図　ニート状態の若者の推移
（厚生労働省　若者雇用関連データより）

さらに第８図をご覧ください。これは完全失業率の推移を示すものです。この中で注目すべきは，15歳から24歳までの年齢層の失業率の高さです。学校卒業と同時に就職しておきながら，就職後３年以内に離職する若者の多さが大きく関係しているに違いありません。

次代を担う成長期の若者たちがこのような状態に置かれることは，将来にわたる民度の向上を考えるとき，大変な社会問題であり社会的損失です。その結果，この世界トップクラスの豊かさにあるこの日本社会の中で，生活保護受給者数が戦後最大になり，その中に働く能力を持ちながら保護を受けている人が多数居るという異常事態を，私たちは真剣に考えなければなりません。

以上厚生労働省が提供するデータを見てきましたが，次代を担う若者達のこと，そして将来の日本のことを考えるとき，若者たちが学業を終えて最初に社会に出る，つまり就職の問題を真剣に考える必要があると考えます。私は若者達の就職活動には基本的な問題があると考えています。学生達の就職活動は間違っているとさえ思っています。しかしながら行動は間違っているものの悪いのは若者達ではなく，適切な指導を行っていない大人達に問題があると考えています。 なんといっても若者達にとって，本格的な就職は初めてであり，自分で生きる人生も初めてです。初なのです。安易な進学をする若者が増え，社会への関心は薄く，人生を考えることもなく，したがって自分の就職観を持たず，ただ慣例に従って就職活動を行っているかのようです。それに適切なアドバイスをするのは大人たちの役割ですが，大人たちにもアドバイスするほどの自分の就職観がないのかもしれません。

最近，大学生の就職活動で，両親が障害の一つだと聞くことがあります。私はこれまでに何度か，北海道や九州の大学から，保護者を対象にした就職セミナーの講師依頼を受けました。

3. 就職問題に関する私の主張
・・自分の就職観を持とう

「学生達の就職活動は間違っている」，これは日頃からの私の主張です。このように主張する端的な根拠は第４図に示された離職率の高さです。「厳しい就職活動の末やっと得た職場を，自分で選び自由意志で決断した職場を，わずか３年以内に放棄するとは何事だ」というわけです。長年採用活動にかかわり多くの学生達と向き合ってきた経験から，その原因は学生達の就職観にあると思います。まず自分で考えた自分の就職観など持っている人は少ないか，持っていてもきわめて単純，幼稚だといえます。

学生達に「なぜ就職するのか？」と質問すると，「これまで親に養ってもらったので，これからは自分で働き食べていくため」と，いとも真面目に答える大学生は多い。この世界一豊かな国，飽食平和ボケとも思える日本社会で，最高学府たる大学を卒業しようという学生達が，起きている時間，つまり人生の大部分を，食うための働きに費やすというのでしょうか？　これでは就職しても長続きしないでしょう。失業しても生活保護費さえもらえれば，食べていくことさえできれば，あえて就職などしないという人が居てもおかしくないでしょう。

ある経済新聞社が毎年調査して発表する，就職活動中の大学生達の就職意識調査結果によると，その80％前後の学生が，その就職条件の中に「面白い仕事ができる会社」を含めているという。これも就職して長続きしない原因の大きな部分を占めているでしょう。 仕事は自己都合でするものではありません。 いくら自分にとって面白く自己満足できても，顧客満足がなければ仕事をしたことにはならないということを忘れていないでしょうか？　就職を部活への入部と誤解していないでしょうか？　仕事とは本来自己都合で，自己満足のために行うものではなく，顧客都合に合わせ顧客満足のために行うものです。したがって自己都合だけで働くことを考える人にとって，仕事とは面白くないものだと思って間違いありません。だれかが面白い仕事を見つけて，そんな遊園地のような職場を提供してくれるなどということはないのです。つらいかもしれない仕事を面白くするのは自分の責任なのです。

近年，キャリアカウンセラーという資格を持った人達が多くなりましたが，いったい彼らはどのようなアドバイスをしているのでしょう？　第４図に示した状況は，この10年以上にわたってほとんど変わっていないのです。大人たちが若者達にアドバイスすべきことは，厳しい社会を認識させ，それでも挑戦していく勇気と希望，そして自分自身の就職観を持つために必要なヒントを提供することかと思います。

私は就職とは「学生から社会人になること」，つまり「これまで一方的に社会の恩恵を被って育てられ学ばせていただいた立場（Take only の世代）から，成長の過程で身に付けた自分の持てる能力を精いっぱい生かして，その社会の維持発展のために参画しながら，一方で自分の人生も楽しむ立場（Give & Take の世代）に変わること」だと考えています。

また学生達の就職行動を見ていると，毎年のことながら「安心安定」な就職先を求めて大企業，公務員希望者が多い傾向にあります。さらに最高学府で学んだ若者たちが，仕事をするために就職するというのに，「社内教育制度の充実」を就職条件に挙げているのも実に滑稽なことです。大学は学ぶところですが，就職は仕事をすることが目的であることに気づかせてあげなくてはなりません。

一方で，今や10年一昔の時代ではなく，ドッグイヤー，マウスイヤーと言われるほどに，環境は激動しています。 今日ある仕事が明日もあるとは限らず，今日の最先端が明日は陳腐化の時代であり，今年好業績の会社が明日も好業績とは限りません。また，若いときの数年間，学校で専門的なことを学んだとしても，それで自分の一生が決まるはずがありません。学校で最優先に身に付けるべきは，決して最先端の知識や技術ではなく，社会にどのような変化があったとしても，そのなかで社会の一員として逞しく生きていくための基礎学力であり人間力でしょう。そのために，先ずはしっかりと学ぶことです。その上で就職に当たっては，どのような難問に

遭遇しても決して逃げ出さず，挑戦する覚悟のできる就職先を見つけることです。そのために大切な要素は，決して目先の仕事や処遇ではなく，安心安定でもありません。苦しくても歯を食いしばって皆と一緒になって我慢し苦労もできる，価値観を共有できる職場，企業文化の会社を見つけることです。

職場は起きている時間の大部分，つまり人生の一番重要な時間を過ごす場です。職場は自己表現，自己実現，自己成長の場として，自分の人生の質を決める場所です。就職活動を始める前に，先ずは就職とはどういうことかを良く考え，自分の就職観を持つことが先決です

4. おわりに

これは，生まれて74年，社会人として55年の，激動の人生を生きてきた体験から，リスクのある人生こそが面白い，リスクのある仕事にこそ取り組む価値があると考える私から，これから就職活動を始め，学業を終えて社会へ出てくる若者達へのアドバイスです。本稿は大学生を例にして書いてきましたが，高校生，専門学校生，短大生や高専の生徒達にも，この大学生を例にした意見は参考になるでしょう。 さらに詳細は，YouTubeにアップされている大学生対象の，私の就職セミナー講演動画，あるいは去る９月20日に幻冬舎から新書版で発行された「いつ倒産しても良い経営」というタイトルの本をご覧ください。この本はビジネス書でも経営学の本でもなく，これから社会に出てくる若者達に伝えたい，私の社会観であり人生観をまとめたものです。